

# 「環境人材育成のための教育プログラムワークショップ」

## の概要



### 成蹊大学廣野名誉教授とご一緒に

左から大塚教授、奥野学長、廣野名誉教授、安保副学長  
～大阪府立大学 サイエンスホール～

主 催：大阪府立大学 21世紀科学研究機構 エコ・サイエンス研究所

日 時：平成23年2月10日（木）13:00～15:20

場 所：大阪府立大学 中百舌鳥キャンパス サイエンスホール（A12棟）

参加者：69名（本学教職員・本学学生・他大学教員・一般企業・NPO・その他）

プログラム：

1. 開会挨拶 大阪府立大学学長 奥野 武俊
2. 特別講演『大学における環境人材育成のあり方』  
成蹊大学名誉教授 廣野 良吉
3. 基調報告『実践型教育プログラムの展開』  
工学研究科教授 大塚 耕司
4. リレー発表『コーディネーター教員の想い』  
人間社会学部教授 森岡 正博  
経済学部教授 津戸 正広  
生命環境科学研究科教授 北宅 善昭  
工学研究科教授 横山 良平  
工学研究科准教授 竹中 規訓
5. 閉会挨拶 大阪府立大学副学長 安保 正一

（司会：総合調整室室長補佐・小川ひろみ）

## 奥野学長の挨拶



「環境学」構築を  
熱く語る奥野学長

ワークショップの冒頭、大阪府立大学・奥野武俊学長が開会挨拶を行った。出席者と環境人材育成教育プログラムの関係者に対して謝辞があり、環境人材育成のための大学教育プログラムは、実施から2年目に入ることから、その経過を報告したいと語り始めた。

奥野学長によれば、本教育プログラムのきっかけは、3年前に大学の池をビオトープにしようという声があったことである。「私は、大きい意味では府立大学全体キャンパス自体がビオトープではないかと思い、『府大池だけを』と言う考えには反対した」とその時を振り返った。

さらに、「現在、『環境』を貫く『環境学』はまだ構築されていない。同様に昔は『医学』も学問ではなかった。体系化されたからこそ、今では『医学』になっている。そのような工学・経済・生命環境・理学・哲学の先生もいる府立大学で『環境学』のきっかけを作ることは私の責任だと感じた」と言い、今後の教育プログラムへの期待を表明した。

## ★特別講演『大学における環境人材育成のあり方』成蹊大学名誉教授 廣野 良吉

成蹊大学・廣野良吉名誉教授が1時間余りに亘って、特別講演を行った。廣野先生によれば、1950年代のアメリカ・シカゴ大学大学院時代には、すでに、アメリカでは環境問題が着目されており、20歳代後半には、インターンシップ先のカリフォルニア大学では、学生たちと環境問題を訴えるデモにも参加した経験もあると言う。

日本に帰国後、廣野先生は、1960年代、東南アジアなどを回るようになったが、70年代半ばから経済成長が定着化し、都市部では車が増えて排ガス・交通渋滞がひどくなり、ごみ問題も露呈してきた。また、中国では、70年代後半の改革開放政策で急激な経済成長があり、80～90年代に掛けて東南アジアの発展とともに環境問題が深刻になったと語る。

国連や政府開発援助（ODA）の顧問、環境庁で公害対策問題をご経験され、ご尽力される中で培われた廣野先生ご自身が感じられたことを踏まえて、日本の大学に期待することを中心に、以下のような内容の講演を頂いた。

1. アジア諸国の環境将来像と対策
2. アジア諸国が国内外の環境悪化で国際社会に期待すること
3. 環境人材育成でアジア太平洋諸国が日本の大学・大学院に期待すること



ご講演の様子



コーディネーター教員  
左から竹中准教授、森岡教授、横山教授、(廣野名誉教授)、  
大塚教授、津戸教授、北宅教授

### ★基調報告『実践型教育プログラムの展開』工学研究科教授 大塚 耕司

エコ・サイエンス研究所長でもある工学研究科・大塚耕司教授が、基調報告として、環境人材育成のための大学教育プログラム全体の概要説明を行った。この中で、特に平成23年度は学部・大学院ともに演習科目を開始することが強調された。この教育プログラムは、環境省の公募事業に採択されており、学部では「専門性」と「俯瞰力」を持ったT字型人材、大学院では、「国際協調力」を養う教育プログラムを推進していることの説明があった。

現代の環境問題を理解するためには、自然環境系に加え、社会環境系、心の問題を扱う人間環境系の知識、態度も必要で、今後、国際性を有する人材の育成に努めると決意を述べた。

なお、自身がコーディネーター教員を務める学部・大学院の演習科目では、11月に、学部・大学院の合同報告会を実施する旨が報告された。

### 📌リレー発表『コーディネーター教員の想い』

#### 📌 人間社会学部教授 森岡 正博

～学部「環境・生命・倫理」をコーディネート～

副専攻「環境学」の必修科目である「環境・生命・倫理」のコーディネーター教員である人間社会学部・森岡正博教授がリレー発表のトップバッターとして想いを語った。

「環境・生命・倫理」は、履修生は約150名。文系の哲学・倫理の方向から環境問題を見ていく授業である。森岡先生は人間を取り巻く外なる自然と、人間に内在する内なる自然の関係を考えることの重要性を語った。

この科目を担当する4名の教員について、以下のような報告があった。

○森岡先生・「環境をまもるとは何を守るのか」、どこまで実践が深まっても突き当たる

問題である。人とペットの関係を共生と言っても良いのか等、学生にも挑発的な授業を行う。

○樫本喜一先生・・・日本の公害問題の原点として芦尾銅山鉱毒事件の話を取り上げる。原子力の平和利用問題については歴史的視点からみる。政府・住民運動の余り知られていない話など。

○浅井美智子先生・・・未来の子どもたちを産み育てるという視点から、生殖技術の倫理問題や、環境問題を生み出した文明の近代化について話をした。看護学部の学生にとってはとくにインパクトの強い講義であった。

○吉本陵先生・・・古代よりある技術と、現代のテクノロジーの違いを強調して、テクノロジーとどうつきあって行けばいいのか、将来世代への責任とは何か、などについて思索を行った。

森岡先生は、哲学的思考は現場で実戦するときに誰しものが抱いてしまう根本的な疑問を、いまここで考えていくことであると語った。

## □経済学部教授

## 津戸 正広

～学部「環境学と社会科学への招待」をコーディネート～

副専攻「環境学」の必修科目「環境学と社会科学への招待」のコーディネーター教員である経済学部・津戸正広教授は、環境問題を考えるヒントになる授業展開を心掛け、履修生は80名で授業態度は大変まじめであったと語り始めた。

この科目は、3名の教員に加え、シャープ（株）が3コマ分の授業を行った。それぞれの分担と学生の反応に関する説明があった。

○片山直子先生・・・環境権と法律について

○シャープ(株)・・・「経営と環境戦略」「経営と持続可能性」「企業の社会的責任」について

○茅原聖治先生・・・「市場経済と生産の効率性」「外部経済とはなにか」「公共財の特質と市場の失敗」について

アンケート結果によれば、「環境法の話が新鮮であった」、「ものの見方は多面的で答えは一つではないことが分かった」という感想があり、また一方で、熱心な生徒からは「統一的な立場からもっと専門的な講義を希望する」という声もあった。オムニバス形式は好評であり、特に、シャープ(株)による実践的な講義は学生に好評であったと語った。

## □生命環境科学研究科教授

## 北宅 善昭

～学部「自然環境学概論」をコーディネート～

副専攻「環境学」の必修科目「自然環境学概論」のコーディネーター教員の一人である生命環境科学研究科・北宅善昭教授は、かつて万葉集では大伴家持が「わが宿の いささ群竹 吹く風の音のかそけき この夕べかも」と詠ったことを紹介し、現在の竹林が荒れ果てた原因や、在来植物種の保護、景観保全や防災のために竹の繁茂を抑えなければならないことなど、竹林を例として想いを語った。

またゴルフ場の開発を例に挙げて、林地では地下数 m から地上 20m 程度まで生態系が形成されているのに対して、整備されたグリーン（芝地）の生態系は、地下数十 cm から地上 10cm 程度しかなく、その保水力は小さく、CO<sub>2</sub> の吸収も少ないことを説明し、このような人間の行為を、私たちはどのように考えなければならないか、問題を提起した。

担当講師陣のバックグラウンドは自然科学であるが、科目名は「自然科学概論」ではなく「自然環境学概論」であり、また「自然環境科学概論」でもなく「自然環境学概論」であることから、この講義の意義を考えていただけたら、と締めくくった。

## □工学研究科教授

### 横山 良平

～学部「自然環境学概論」、大学院「国際環境学特論」の2科目をコーディネート～

副専攻「環境学」の必修科目である「自然環境学概論」と「国際環境活動プログラム」の「国際環境学特論」の2科目のコーディネーター教員を務める工学研究科・横山良平教授は、ここでは、大学院「国際環境学特論」についての想いを述べた。この科目は、海外で環境活動を実施するに当たり必要な、各国の歴史・文化・宗教・開発途上国における経済発展と環境問題への取組み等をテーマにした人文社会系の科目であると語った。

講師陣は、ゲストスピーカー含め 11 名で、履修生は工学研究科 8 名、生命環境科学研究科 3 名の計 11 名。

- ① 歴史・文化・宗教、教育の視点から杉山雅夫先生、中村治先生、大形徹先生、吉田敦彦先生
- ② 国際的な取組み、発展途上国の開発の視点から JICA から 4 名の講師陣
- ③ 社会経済システムの視点から関西電力、行政の立場から大阪府

吉田松陰の師、玉木文之進の言「学は公なり、私事に非ず」を引用し、学生には世界後世のために時間空間を超えた意識を身につけてほしいし、教育者としては「井型人材育成」の可能性を目指すとの想いが述べられた。

## □工学研究科准教授

### 竹中 規訓

～大学院「環境コミュニケーション特論」をコーディネート～

「国際環境活動プログラム」の「環境コミュニケーション特論」のコーディネーター教員である工学研究科・竹中規訓准教授は、「環境コミュニケーション特論」は翌年度の「国際環境活動特別演習」に必要な知識の習得を目的にした科目であると述べた。

海外で調査するに当たり必要なコミュニケーション能力、とりわけ会話・メール・手紙について講義。専門は chemistry であるが、海外経験でこれらの必要性は感じていたので取り入れたと語った。

環境関連の単語・ベトナム人の英語を体験、ベトナム通訳の北山夏季先生から語学講義の他にも生活習慣・礼儀・歴史等のテーマを取り入れたと言う。11 月にはベトナムからの研修生も授業に参加し、学生とコミュニケーションを図った。

もう一人の担当講師である本学の前田泰昭特認教授は、元 JICA のエキスパートでベトナムの



環境の現状について研究されている先生で講師を依頼したとのこと。

平成 22 年度の最終講義では、ハロン湾での活動を想定した、学生による模擬環境活動の presentation を実施。座学を超えた形式で来年度も進めたいと想いを語った。

### 📌閉会の挨拶 副学長 安保 正一

ワークショップの最後として、大阪府立大学・安保正一副学長（21 世紀科学研究機構長）が閉会挨拶を行った。まず、成蹊大学名誉教授の廣野先生に、本教育プログラムの立ち上がりからご支援を頂いたことにお礼を述べた。

学生に対しては、多様性・人類・文化・国籍等について学び、吸収し新しい情報発信をしてほしいと要請し、国際連携も非常に重要であることから、先生方のネットワークを活用し国際貢献、環境人材育成に努めたいと抱負を語った。最後に、21 世紀科学研究機構の取組みについても紹介し、締めくくりとした。

閉会の挨拶とお礼を述べる安保副学長



会場のサイエンスホール内  
ご参加者頂いたみなさん

